

これまでの芸術ワーキンググループにおける 主な意見

第1～6回芸術WGにおける主な意見①

【創造性】

- 芸術系教科の特徴として**創造性**がある。自分にとってどんな価値があるかを考えることにより、世の中の様々なことが自分にとって意味のあることになる。それが芸術系教科を学ぶ意義ではないか
- 美術教育における**創造性について、意味や価値をつくりだす**ことは、見方・考え方に位置付けられているが、現実に対する意味、そして、まだ見ぬ未来に向けた意味、つまり、子供による問題提起が重要
- **創造**することの喜びを味わい、自ら考え、自らものをつくっていくという創造する能力は変化の激しい社会において重要な資質・能力であり、芸術系教科の根本となる。
- 児童生徒が主体的に自分の感性で作品をつくる際の前提としてコンセプトワーク（企画・構成員）を大事にしたい。論理的思考、**創造的思考**、批評的思考などが複雑に入り込んでいる。イノベーションが求められる現代社会においてこれら三つの思考は重要。
- 芸術教育は鑑賞者だけではなく表現者を育てるということを考えたときに、**創造性**と結びつく。子供たちの**創造性**を育むために、教師がどのように**創造性**を意識した授業デザインができるかを考えることが重要。
- 芸術系教科において**創造性**を育むためには、知性と感性をどのように関連付けて新たな価値を生み出すか、または自分で価値を見出すか、という学習が重要。
- 中核的概念等の示し方に関しては、現行の学習指導要領を発展し、**創造性や感性**といった要素でまとめるべき
- **創造性**は高次の資質・能力であり、**創造性**を支える基盤的能力を柱の中に位置付けることにより指導の具体性が実現される。
- 【音楽】音楽は再現芸術が中心であり、既存の曲から作曲者の意図を探りながら演奏していくという特徴がある。授業でみんなで演奏する活動で、作曲者の考えや音楽構造を読み込んでいく中で、いかに自分のオリジナリティのある表現を見いだしていくか、それをみんなで表現し創意工夫を位置付けていくのが大事。
- 【図画工作】図画工作・美術科の現行の見方・考え方の文末は「意味や価値をつくりだすこと」であり、**教科の本質的意義である創造の重要な部分**である。「つくる」ではなく「つくり、そしてだす」という中に、これまでになかった意味や価値を創出する意味がある。創造は現状の問題解決のために発揮されるだけでなく、未来に向けた問題提起としても発揮される。
- 感性や**創造性**が大切であり、感性はよさや美しさについて心が動く、この点を育てることが重要。**創造性**では、身体も使いながら自分自身にとっての意味や価値をつくりだすことが重要。それは、自分自身をもつくりだすことである。
- 【音楽】創造は大事なことだが、言葉自体が様々な意味を持ち、文脈によって意味が変わるので慎重にならないといけない。
- 【音楽】創造性は音楽の理解や技能、習得だけでなく、自らが音を生み出して新しい表現を構築する力。**創造性という資質・能力に主軸を置いて考えることも必要**であり、どのような資質・能力と関連するものであるかをぶれないように考えていく必要がある。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②

【創造性】（つづき）

- 【音楽】「創造的」が入ることで**芸術系教科の意味や意義が明確になった**。ただし、小学校では少し難しい可能性がある。
- 【美術】目標のレベルが造形的な使われ方に限定されている印象。**造形的な観点にとられすぎると、創造の土壌を耕す教育に繋がるかどうか疑問**。
- 【美術】「感性や想像力を働かせ」の「想像力」を「創造力」にしてはどうか。考え方が限定的なものから、のびのびとイメージを広げるというものにするという考え方で、クリエイティビティの創造が適しているのではないか。
- 【美術】学びに向かう力、人間性等については概ね同意だが、「美術の創造活動に取り組み」については**柱書に持って行く形に戻してもよいのではないか**。
- 【美術】美術教育の目標は、創造的な取組を通じて、主体的に世界を経験し探究することがベース。美術そのものが目標ではなく、**創造的な取組が世界を経験するための手段**。
- 見方・考え方の文末が「意味や価値をつくりだす」となっており、前段は様々だが、意味や価値を見いだす・つくりだすという事が、芸術系科目を通底した部分になるのであれば、**創造性の意味や価値を教育の中の重要な思考の一つとして位置づけるべき**。
- 各学校段階の目標について、小学校では「創造的につくったり見たりする技能」が新たに入っているが、創造の過程を考慮すると「創造的につくったり創造的な視点をもって見る」などしたほうが、教員が評価しやすいのではないか。
- 【音楽】小学校の目標について、知識及び技能の「曲や音楽を創造的に表現する」や学びに向かう力、人間力等の「創造的に音楽に関わり親しむ」の部分、「創造的」という文言が入るのはよいが、**文言の整理が必要**になってくる。知識及び技能の後半の技能に関する部分は、思考力、判断力、表現力等の「思いや意図をもったり～」との関連も出てくると思うので**3つあわせて整理の必要**がある。
- 音楽科の学習過程が、様々な活動をしながら諸感覚を働かせ、資質・能力を生かしながら資質・能力を高めていくこと踏まえると、私がイメージする高次の資質・能力を身につけた児童、生徒の姿は、「何かができるようになったら終わり」ではなく、**既習事項を想起して新たな価値を生み出す姿**だと考える。

第1～6回芸術WGにおける主な意見③

【感性】

- 子供にとっての芸術系教科を学ぶ意義に関し、**子供の中心には感動（心が動かされる経験）がある**。調査結果からもその必要性は感じているが、音楽の学習が役に立つということを感じていない子供が多いことから、音楽を学ぶ意義を子供たちが捉えられるようにしていくことが大事。
- 芸術系教科は**人間の感情に直接的に影響を与える**ことができる。**感性と知性の両輪を働かせることが重要**。特に感性に重きを置くモデルや知性に重きを置くモデルがあってもよい。
- スマホなどで考える間もなく情報が入ってくる中において、芸術系教科を通して自分とは何か、美しいと感じた理由は何かを思考することで、新たな価値をつくりだすということが重要。正解を求めるのではなく、身体と心を使い、感覚的に捉えることと論理的に思考することを繰り返すことによって、実感的な理解することに意味がある。
- 芸術系教科を学ぶこと自体が**感性**を育む上で重要であり、**つくりだす喜びそれ自体の大切さ**も忘れてはならない。
- 芸術系教科を学ぶ意義を明確化することは教師にとっても子供にとっても重要で、**「感性」は一つのキーワード**になる。
- 芸術系教科は**感覚的に捉えることが感性の育成にも繋がる**という特性がある。また人間の感情の変化に影響を与えたり、人間として芸術活動をする上での喜びを体験することが精神浄化につながっていく。
- 【書道】書道の制作過程は一回性であり、筆記具とその対象となる紙が触れ合う**触覚、研ぎ澄ます視点**が重要となる。
- 【音楽】見方・考え方について、もう少しすっきりさせるために、「音や音楽を芸術的な感性及び知性を働かせて捉え」、としてはどうか。これからのA Iの時代や、将来の仕事の展開を考える時に、**芸術的な感性及び知性は大事な視点**。
- 【音楽】「豊かな情操を培う」ことが科目目標に明記されるのは重要。
- 【音楽】自己のイメージや感情のように**直感的に想起されるものについて、自分にとっての意味や価値を見いだすために必要**。楽しさや美しさを意識するためには**感情面との結びつきが大事**。内容を含めどこかに記載が必要なのは。
- 「感性を働かせ」を文頭（見方・考え方）に置くのなら、冒頭の言葉が後段にもかかってくるので**「感性や想像力」の方が適切**。
- **「感性を働かせ」が文頭（見方・考え方）にきているのは重要**。感性や想像力が、造形的な視点でとらえる際や、意味や価値をつくりだす際のいずれにも働かせていることがこれまでの学習指導要領にも位置付けられている。
- 【書道】「書の美を感じ取り」となっているが、**高等学校では、美ということについて考えることが重要**。今後の検討の中で、**芸術教科全体の目標や見方・考え方、共通の学びとして美を位置づけられないか**。
- 「豊かな情操を培う」をすべての教科・科目の目標に入れたのは良いこと。情操とは、**心が動いても元に戻る、復元して安定して、その人自身の機能をフルで活用させられる能力**だと考えている。説明においても、そうした気持ちを安定させることも含むよう整理できるとよい。
- 「感性を働かせ」（見方・考え方）に関して、芸術教科の領域を代表する文言の一つであり、可能な限り共通した書きぶり・表現・言葉遣いがふさわしい。**すべてに関わる土台という意味で、文頭に感性がくるのはありうるのではないか**。
- 目標からみたとときの高次の資質・能力を考える必要もある。初めて教員が「高次の資質・能力」を見たときに、「高次の」が論理的なイメージになってしまうのではないか。**芸術の基本である「直感」「感性」「創造」などのキーワードを入れるのがふさわしいのではないか**。

第1～6回芸術WGにおける主な意見④

【身体性】

- 身体性を音楽学習のみならず、教科横断等の枠組みに位置付けることで、我が事としての学習が実現し、ひいては全ての教科等にかかれた感性や知性、創造性の土壌となり得ると考えている。
- 芸術系教科では、実際に本物に触れる教科特性があるので、身体性が重要。思考・判断・表現の技能に偏った授業も見られる中で、聴いたり、目で見たり、感じたりしたことを学びとして表現したり、言葉で表していくことも大事。
- デジタル機器の活用も大切であるが、実際の対象物を諸感覚で感じるフィジカル要素も重要。
- 体験活動や諸感覚を働かせて学ぶフィジカルに関するものが教科理解の上で重要。幸福な人生の実現のためには、トップダウン型の学習だけではなく、美術教育に多く含まれ、学習者本人のありようを尊重した学びであるとともに、幼児期から繋がる諸感覚を駆使した身体性の学びであるボトムアップ型の学習が必要である。
- 芸術系教科の意義、強みは、個人の身体的体験により感情や感覚を巻き込んだ学びができること。個人の感覚・感情と結びついた学びにより身に付いた知識は、他の学習でも生き、ちょっとした違和感に気付く能力のように社会の様々な職業でも生きる。
- 体験が大事であることは言葉で伝えるのではなく、実際の音楽体験や造形体験に基づいて子供たちが実感するものでなければならない。美しいものをつくらなければならないという結果を重視する価値観が子供たちの中にあり、それを払拭していくことが重要。
- 【美術】身体の諸感覚を働かせることは重要であり、芸術系教科の役割。検索すればすぐに答えにたどり着ける環境も大事かもしれないが、逆に想像すること、新しいものをつくりだすこと、問いを立てることの妨げになり得る。タブレット端末は答えを見つけるのではなく、問いを生み出すことに用いられることが重要。

【想像力】

- 想像力は図画工作・美術の現行の見方・考え方に含まれるキーワードであるが、芸術系教科・科目全体で育成すべき資質・能力としていくことが重要。想像力を生かし、授業で学んだことと社会や生活の中での芸術に共通項を見いだすことが芸術を学ぶ意義の認識に繋がる。
- 【図画工作】図画工作では児童が自分のイメージをもちながら主体的に発想や構想をすることが重要であり、発想や構想をする時間を確保することやICT端末を活用することも考えられる。
- 【音楽】現行学習指導要領では「自己のイメージや感情」が入っているが、たたき台では削除されている。現場の子供たちの様子を踏まえると、削除してもよいかどうかは検討が必要ではないか。
- 思考力、判断力、表現力等について、言葉で考えず、頭の中で想像することが点と思うので、イメージ力は強調してもよいのではないか。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑤

【多様性理解】

- 「**多様性の包摂**」はこれからの時代において重要。特に芸術系教科ならではの様々な学びにつながる。
- **多様性を個人や社会の力に変えていく**という点が芸術系教科の強みであり、これを基本的な考え方として、芸術系教科を学ぶ意義を考えていきたい。
- 芸術系教科は絶対的な正解がない学びであるので、**多様性（寛容性）の概念**も入り得るのではないか。
- 芸術系教科では、一人一人の特性を生かした学びが可能となる。特別支援教育の学びは芸術系教科との親和性が高く、例えば合唱では声が高い人、低い人で別れて歌うが、これはインクルーシブな場であり、**多様性の包摂にもつながっていく**。
- コマ撮りアニメやプロジェクションマッピングといった様々なデジタルを活用した題材が行われているが、小学校のクラスに学習面や行動面で著しい困難を示す児童がいる現状で、デジタル学習基盤は**多様性を包摂**するために使うことも考えられる。
- 芸術系教科は分からないことや理解できないことに面白さを感じる事がスタートであり、理解することがゴールではないところに特色がある。探究を通して、自分や他者、世界や社会におけるウェルビーイングを理解していく楽しさが、**多様性につながる**と考えている。
- 表現や鑑賞における対話において、自分の考えや意見をもつことに加えて、他者を受け入れる学習が学校教育の学びとして重要。将来社会で他者と協働しながら生きていくことに有効であるとともに、互いに尊重する態度を育することにより**多様性の包摂**の視点からも重要となる。
- 【書道】教師の提示する文字や作品にいかに近付けるかといった再現性を求めるだけの授業からいかに脱却できるか。ICTを活用して生徒の学習履歴を保存することで、生徒一人一人が感じたり考えたりしていることが異なったり、単元が進む中で、自己や他者の考え方や感じ方が変容していくことを自分として確認することもできる。そうした活動の中で、自己の考えをどのように形成していくか、という視点が、**多様性の包摂**につながり、芸術科の強みである。
- **学びに困難を抱える子供たちにとって芸術系教科の学びは重要**。論点整理に示されている「「好き」を育み、「得意」を伸ばす」が、各教科の特性を考えた時に学びに向かう力・人間性等に限られず深い学びの実装にも関わるといふ視点からの検討が必要。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑥

【主体性】

- **子供自身が考えることができる指導が重要。**指導過多でも放任でもなく、教師が指導することと子供が考えることとのバランスを考慮ことや、**学習の過程を重視した指導が求められる**
- 表現と鑑賞の関連について、例えば、国際バカロレアの中等課程では、調査研究を行い、深く文脈に沿って美術を捉え、アイデアを探究し、創作し、振り返りをする。**作品だけで評価するのではなく、過程を大切にすることにつながる**
- **子供自らが問いを立てて課題を解決できる**ような授業を考えることが大切。また、教師自身が授業を通して、どんな子供を育てるのかを考え、子供の姿からその資質・能力を発揮できているか捉えて、価値付けていくべき
- 子供の表現に関わる大人や周囲の環境について、教師や子供と関わる大人等の学習観や子供観もアップデートさせることが重要。**子供が自律的に学習することがどういうことなのかについて共通理解を得るべき**
- 【音楽】思考・判断・表現と表現の技能をつなぐ資質・能力として、**試行錯誤する力が重要**。試行錯誤して答えを見つけ出すことは問題解決の能力として重要である一方で、試行錯誤する場面が少なくなっている。量的な時間としてではなく身体により体験される質的な時間として試行錯誤の重要性を考えていく必要がある。
- 【美術】美しいと感じると同時に、なぜ美しいと感じたかを考えたり話し合ったり説明したりする力がますます重要。教師が視点を示すことは、発達段階に応じて必要だが、**知識を一方向的に教えるのではなく比較したり語り合ったりして自ら獲得していくことが重要**。また、教師が子供の多様な視点や考え方を見付けたり価値付けたりして、子供が気付いていないところも教師が拾い出して整理する力が求められる。
- 【図画工作】学びに向かう力・人間性等の「主体的、協働的に、楽しく創造活動に取り組み」の部分は、現行学習指導要領の学年目標にも記載があり、**楽しさを感じながら創造活動に取り組むことの大切さを改めて打ち出しており重要な視点**。
- 【図画工作】「主体的・協働的」は、**教師が指導することと子供が考えることとのバランス**を考え、子供たち自身が考えることが出来るようにするというところに繋がるものであり重要。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑦

【文化の理解】

- 文化への理解は重要であり、**我が国の文化**とはどういうものなのか、どういう文脈でその文化があるのかといった、**広い視野でとらえることが大切。**
- **芸術が生まれてくる背景や歴史の基となる文化や社会があることを理解**することが重要。グローバルな視野の下に自己を見つめ、多様な文化理解に伴って再度自己理解へつなげていくことも必要。
- 芸術系教科の特質は、**文化芸術の継承と発展**を担うもの。
- **伝統文化の学習は重要。**日本人としての見方あるいは考え方、ひいては日本人とは何かを考えることが重要。
- 伝統文化の学びについて、外国の文化を知ると自国の文化のよさも学べる。**地域素材や我が国の伝統音楽に関する教材を用いるなど、学校で伝統的な音楽や文化をしっかりと学べるようにしていくことは重要。**
- 発達の段階を踏まえつつ、鑑賞だけでなく、表現においても**文化の理解**について学び、芸術系教科全体を通して学習することが大事。
- 【音楽】グローバル化する社会で生きていくために異文化理解が重要であり、我が国の郷土や伝統音楽に対する理解はもちろんのこと、**世界の諸民族の音楽に対する理解**について学ぶ意義を示すことは大切。
- 【美術】子供たちが身近な生活の中に根付いている美しい文化を見付けだすという活動を通して、自国だけでなく他国も含めた**文化の理解**に繋げていくことが重要。
- 【書道】伝統文化の視点として、自国の**文化の理解**は他国の**文化の理解**につながりその逆もしかり。グローバルな視点、多様性の包摂に繋がっていく。日本特有の視点がこれからの社会で日本独自の新たな価値を生み出す根底になる。
- 【音楽】見方・考え方の教科固有の考え方や判断の仕方に、**小学校にも「伝統に関わらせる」ことを含めていることは重要。**
- 【図画工作、美術】「文化」が各学校段階に位置付けられている（見方・考え方）が、子供たちには継承と創造の二つの意味をもつ。**文化がもつ意味をふまえ、発達の段階に応じた文化の位置付けを整理していくことが重要。**
- 【美術】美術文化と豊かにかかわる資質・能力の育成について、教師がその価値を一方的に教えるのではなく、**子供たちが作品と出会い、自分自身の目でよく見ることを出発点にして、美術の働きや美術文化のよさを楽しみ、味わうことが重要。**
- 【美術】美術文化の理解というと、鑑賞をイメージする教員が多いかもしれないが、全国における実践には表現の授業も数多くみられる。**見ることとつくることの両方を通して、文化が身近な生活にあり、歴史の中で受け継がれてきたという実感的な理解に繋がっていくことが大事。**
- 【書道】伝統や文化について、伝統文化の目標に係る文言には賛同するが、**見方・考え方に含めなくてよいのかどうか検討が必要。**
- 【美術】「美術や美術文化と豊かに関わる」（目標の柱書）について、「美術や文化と豊かにかかわる」としてもよいのではないかと。芸術系教科は文化を根底から広く捉えられる教科であり、芸術が相互に関連していると考え。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑧

【文化の理解】（つづき）

- 子供たちが向かうべきは**文化を継承し発展することであり、発展させるという思考を育むために、創造力、意味や価値を見いだす**という風に働かせるべき。
- **【図画工作・美術】見方・考え方については、各学校段階を通して共通に示すと記載があり、全体が端的に示され、かつ文化を重視することを踏まえた修正がなされている**のはよいと思う。伝統という視点いれる考え方もあるのでは。未来の社会の在り方を創造することや、学びを生きた知識や技能に学びを繋げていくためにも、**伝統と文化は切り離せない存在である**。
- 各科目の見方・考え方に「伝統や文化などの視点」などの文言が共通して入ったのは、**文化に対して責任持つ教科というのが明確にできて良かった**。文化と我々が取り上げたときにはそこに継承と発展がある。**子供の学びに文化としての発展を踏まえている**ということおさえておきたい。

【協働性】

- 子供たちが芸術系教科の意義を感じながら学ぶことが重要。学校という集団の中で芸術を学ぶ意義とは、**他者と自分との関係性の中で学校が相互承認の場であり、自己肯定感や自己有用感が育まれていく**。
- 端末を活用しながらも、個人的な作業ではなく、ともに学び**他者と一緒につくりだす喜びや自分が刺激を受ける喜びが必要**であり、学校で芸術を学ぶ意義はここにある。
- **【音楽】聴覚だけではなく、視覚や雰囲気など諸感覚を働かせた学びが重要**。音楽は時間の流れとともに消えゆく芸術であり、一回のみの時間を楽しむことに音楽のすばらしさを感じられる体験が大切。**仲間と一緒につくり上げる**ことの喜びが特徴であり、少人数での可能性や自分で選んだ仲間とともにつくりあげる、多様性を意識することも重要。
- **【音楽】音楽は諸感覚を使う科目であり、仲間とつくり上げながらも自分がどう生かされているか、どんな役割を果たしているかを捉えることが必要**。伝統文化を題材にするときには自分自身が文化の継承者であることなどを自覚できるようにすることが必要。
- **【メディア】創造的なプロジェクトを協働して実行する力**を育むことが重要。作品を構想して発表するまでの間に多くの対話があり、自身の考えを表明するとともに他者の多様な考え方を受け入れ問題解決の糸口を探る。よりよい社会の形成や民主主義社会の基盤を支えることにもつながっていく。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑨

【知識・技能】

- 芸術教育そのものである**知識・技能の学びを大切にすることが芸術教育の本質**である。
- 【音楽】音楽をイメージや感覚で捉えるだけでなく、**用語や記号を正しく理解することで他者との共有や共感が可能となる**。知識を積み上げていくことで、生活体験と関わらせながら音楽の**理解がより深まる**ことに繋がる。
- 【図画工作】児童が自分の表したいことに合わせて表現方法を選んだり組み合わせたり新しい表現方法をつくりだしたりする、**自分なりの表し方を工夫することが技能として重要**であり、深い学びや**創造性**につながる。
- 【美術】形や色彩、材料、光などの造形的な特徴などを基に全体のイメージや作風で捉えるといった**知識を今後も明確に示していく必要**があり、言葉を使って考えたり、話し合ったりする学習の充実に繋げていく必要がある。このような知識を得ることがものの考え方や捉え方の豊かさになり、**学びの深まりが生まれる**。
- 【音楽】音楽の**技能**は学校を離れたときに、自分一人では身に付けることが難しい性質があるからこそ学校でどのような資質・能力を身に付けていくのかを考えていく必要がある。**音楽に出会ったときに理解できないことが拒否につながるのではなく、学びや豊かな人生のスタートになるためにどう考えるか、どのような知識が必要なのか、自分たちで探究していく力が大事**。
- 【音楽】「②表現したいことをどのように形にできるか」について、技能は含まれるのかどうか。表現したいことをどのように形にできるかに関して技能は関わってくるものであり、**思いや意図をもつことは当然だが、それをどのように形にできるかは技能が必要**となる。
- 【図画工作】**知識と技能の両面に関連させた議論が重要**になってくるのではないか。
- 【図画工作】知識及び技能の「造形の働き」の部分について、**自分や友達作品、生活の中の造形的作用や役割を理解することは図画工作科を学ぶ意義に繋がる**。
- 【美術】知識及び技能の「みることができる」が「創造的」にかかっているのは疑問。鑑賞は創造的に観ることより根拠をもって類推していくことが主である。**知識及び技能の対象を表現・鑑賞に留め、取り組み方、目標達成のレベルのように段階的に記載するのがよいのではないか**。
- 【美術】**美術の働きや美術文化**を知識として記すことは概ね賛成。鑑賞のみならず、表現活動でも行う事で、美術文化を実感としてとらえることができる。注意すべきは、実感を伴いながら理解を深められるため、**表面的な学習にならないように学校現場に説明していく必要がある**。
- 【映像】届けるもの（メディア）があつて初めて人々の目に触れる。**メディアの特性やどのようにそれが届けられているかという点に関する知識も必要**だが、あまり強調されていないのではないか。
- **芸術系教科・科目において知識及び技能が何であるかということは問い直す必要がある**。鑑賞における技能が成立するのかどうかを含めて改めて考えていくべき。
- 【図画工作】目標の後半に「創造的につくったり」とあるが、高次の資質・能力では「実感を伴って理解している」となっており、**目標と高次の資質・能力が演繹的に対応していると言えない**。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑩

【知識・技能】（つづき）

- 高次の資質・能力に「～実感を伴って理解している」とあるが、音楽の学習において「わかること」、「できること」といった基本的なことから考えていかなければならない。獲得すべき知識及び技能は、手続き的なものを含んでいる。今の書きぶりだと、実際に「できる」ことよりも、それを言語化できることに重きを置くように見える。学習評価を考えると、「理解している」という文末の表現は課題が残ると考える。
- 「～実感を伴って理解している」の表現では、これまでの知識及び技能の捉え方と変わってくるので現場で混乱する恐れ。「統合的な理解」については再考が必要と考える。解説などで十分な説明が必要になる。
- 高次の資質・能力の文末が「実感を伴って理解している」となっているのは、一見整理されたように見えるが、音楽科において「理解」という言葉は知識のみで使われており、技能では使われてこなかったので誤解が生じる可能性がある。身体で出来るようになることが軽んじられているように見える。技能習得の時間が削られることの無いように再度検討いただきたい。
- 「実感を伴って理解している」について。これまでと異なる解釈になるので現場で誤解されないかと危惧。中高の教師は専科なのでまだ理解できるかもしれないが、小学校では学級担任が受け持つので特に心配。教員以外も広く学習指導要領を読むことを踏まえると、文章表現をそろえることが本質的なのかは疑問。内容は問題ないが、表現ぶりは検討が必要。
- 「実感を伴って理解している」について、解説が欠かせない。「高次の資質・能力」と「個別の知識及び技能」・「個別の思考力、判断力、表現力等」に順序性があるように感じてしまう。
- 「実感を伴って理解」とあるが、技能を理解すればよい（実際にできなくてもよい）という誤解を招きかねない。知識及び技能は往還関係にあると思うが、順序があるように解釈されないか。
- 「高次の資質・能力」の「捉える」と、資質・能力（概略）の「理解する」の違いは何か。誤解を生むことがない文言にしていかなければいけない。
- 知識及び技能の「実感を伴って理解」は、美術科は他教科の技能とはとらえ方がずれる面もあると考えられるので慎重に考える必要がある。
- 【書道】知識及び技能の「実感を伴って理解」について。メタ認知するという意味で一定程度理解はできるが、技能は体で覚える側面もあることから「理解する」ということには慎重に検討してはどうか。
- 知識及び技能の高次の資質・能力の「理解する」は何を指すのか。言語化することよりも「創造的に表現できる」ことが一番重要であることが学校現場に伝わるようにすべき。高次の資質・能力は子供が最終的に到達できる姿をプレビューしたものと理解。
- 高次の資質・能力について。個々の知識や技能が並列な絵が示されているが、ある知識と知識が統合して新たな知識を獲得するなど、階層がある。「個別の知識」というひとまとめにするのは適当ではないのではないか。
- 【音楽】目標に「曲や音楽を創造的に表現する」とあるが、再表現だけでなく、思いや意図をもって表現することを考えると、「思いや意図にふさわしい表現をするために～」であったり、「曲や音楽にあった表現をするために必要な技能」といったようにしてはどうか。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑪

【知識・技能】（つづき）

- 【音楽】目標に用いられている「曲や音楽を創造的に表現する」の文言。歌唱や器楽の学習では、まず曲が存在するのに対して、音楽づくりや創作では、音を音楽へと構成するので、「曲と音楽」と併記しているのだと想像する。しかし、歌唱や器楽においても、曲という形や様式を踏まえつつ、自分の感性やイメージに基づいた質感の表現を目指すという意味では、**「音楽を創造的に表現する」という言い方でも十分に趣旨が伝わるのではないか。**
- 【音楽】技能の理解についていろいろ検討いただき感謝。「言語化できることと言語化できないが理解できていることということが～」と記載があり、これにより学習のあとに、身に付けたことを必ず説明しないといけない授業が増える**危惧がなくなる**のではないか。
- 知識及び技能に関する統合的な理解の文末記述について、**「言語化して理解できることと言語化はできないが身に付けることがある」ということは大事。**
- 知識及び技能に関する統合的な理解の文末表現について、**丁寧に説明していく必要**。どのように伝えていけるかがとても大事。
- 【音楽】「音楽表現を深めることができる」という点については技能的なイメージがあるので、**「音楽表現における技能的な部分」の技能をどう捉えて提案していくか、考え方の整理が必要。**
- 【美術】高次の資質・能力の最後を「理解している」でまとめることで混乱が生じつつも、**教育現場が受け止めやすい表現**というのもある。
- 図画工作や美術の知識を位置づけるにあたり、**「美術の働き、美術文化について理解を広げる」というのが実施状況調査の結果等を踏まえると重要**。今般教育に携わる関係者でも芸術文化の働きについて十分な理解されているとは言えない。将来、社会を支える子供たちに、芸術教科は芸術だけで完結するのではなく、**他の多くに相互に支える能力を育てていることへの理解を促すことはとても重要。**
- 【美術】知識及び技能に関する統合的な理解について、生徒がほかの学習や生活の場面でも活用できるようになった姿をイメージできる思いが込められ、丁寧でありたい。「実感を伴って理解している」という文末表現が、今回中学校美術などで「美術の働きや美術文化について実感を伴って捉えながら」と**場所が移動しているのは意味があるのでは**と思った。鑑賞領域についても「実感が伴って」の文言が入っているのはありがたい。
- 【美術】中学校美術の**「自分との関わりの視点から」の文言は、「自分との関わりから」でもよいのでは。**
- 【図画工作】知識及び技能に関する統合的な理解について、文言整理された。ここをしっかりと**丁寧に説明していくことに加え、よりわかりやすくなるよう検討を続けていく必要がある。**
- 【図画工作】図画工作ではこれまで知識を共通事項として取り扱っており、知識を活用して思考力、判断力、表現力等を働かせていると解説されている。それをふまえると**高次の資質・能力の知識と思考力、判断力、表現力等の関係についてどう整理するのか、今後検討が必要。**
- 【工芸】目標の知識及び技能の鑑賞領域について、工芸Ⅲでは「工芸作品などの情報を精査しながら情報を読み取る」とある。これまでの学習指導要領になかった文言で現場には戸惑いがあるかもしれないが、**工芸の立場からすると情報を読み取る、精査するというのは工芸の学習にとっては重要な要素である。**

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑫

【知識・技能】（つづき）

- 身体性を含む表現に「理解している」の文言について、各教科で技能をどのように捉えているか気になる。例えばダンスは芸術表現と捉えると、保健体育と芸術科の技能の位置づけは同じような部分がある。そうしたことを踏まえて知識及び技能の整理がされ議論されていくことが理想で、教科横断的な学びの実現を現場教員が考えた時のヒントになる。
- 各教科科目において「理解する」という言葉を使いながらその内容が違うというのは現場の混乱を招く危惧があり、各科目で「理解する」の意味内容や技能の捉え方が整理されていくと良いと思う。
- 高校では各科目を学ぶ前提として「芸術を学ぶ」という視点が重要であり、科目を超えて芸術を学ぶ意味や価値を考え、どんな見方・考え方ができるようになったか再認識していくことが大事だと考える。芸術の知識及び技能の目標に「各芸術分野の～」と示されたことで、教科目標にそれが反映されてとても良い。
- 知識及び技能に関する統合的な理解について、子供がそのように自覚している状況を指しているのか、または低学年の子供がそのように自覚しているかというところは発達段階から完全とはいえないので、子供がそのような状態になるように教師が自覚しているのか、あるいは両方指しているということも考えられる。丁寧に言語化する必要がある。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑬

【思考力、判断力、表現力等】

- 【音楽】「思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮」の「よりどころにして考え」はよいと思う。
- 【音楽】表現領域で、「表現」という単語が何度か出てくる。それぞれで文脈によって意味が若干変わっていることが伝わるか疑問。特に最後の「表現を深める」は技能面を含んだように解釈できるので、「できないといけないのか」と思われかねない。
- 【音楽】「表現」という言葉が出てくるが、音楽の知識及び技能では「音楽表現」という使い方をして、思考力、判断力、表現力等の「表現」と区別していた。技能においては「音楽表現」という表し方にできないか。
- 【音楽】「思いや意図を歌唱や器楽で表す」とあるが、「思いや意図にふさわしい表現」「思いや意図に合う表現」のほうが適切ではないか。
- 【図画工作】思考力、判断力、表現力等の文末が「楽しく豊かに」となっている。楽しくは重要なので必要だが、高次の資質・能力では「楽しく」を越えてくる状況が考えられるため、ここに入れると違和感があるのではないか。
- 【美術・工芸】高校の美術、工芸の「思考力、判断力、表現力等」はSTEAMなども考えると「社会的な視点に立って」だけでは足りないのでは。科学的、産業的、美的などの視点も増やしていくべきではないか。
- 【美術】高校美術の「思考力、判断力、表現力等」を見る限り、各区分であまり違いが見えない。ほぼ同じような内容を繰り返すことにならないか。これなら区分に分けないほうがよいのでは。
- 【美術】「高次の資質・能力」の思考力、判断力、表現力等の「表現を身近な生活や社会との関わりから捉える」の文言は重要なキーワードなので、冒頭に「生活や社会」に対応する「対象や事象をもとに」という文言を入れてはどうか。
- 【音楽】音楽の思考力、判断力、表現力等の目標について、鑑賞の「聴き深める」には「味わう」をいれられないか。
- 【音楽】資質・能力では文末が「深めることができる」、鑑賞でも「音楽を聴き深めることができる」となっており、「できる」という言葉から思考力、判断力、表現力等の高次の資質・能力に表現と鑑賞の両方で技能が含まれているように感じる。この案のままだと、技能の概念とその位置づけについて混乱を招く恐れがあり、整理を行っていく必要がある。
- 【音楽】思考力、判断力、表現力等の目標について、「味わう」という言葉は現場の先生に浸透しているので追記いただき感謝。
- 【音楽】高校の思考力、判断力、表現力等の目標や見方・考え方との関連において現行の見方・考え方で示されていた「自己のイメージや感情」の「感情」がどこにも出てこなくなったなど残念に感じている。特に高校音楽は自己の感情に向き合うというのが大切になるのでどこかに入るとよいなと思っており、具体には「自己のイメージや感情に基づいた～」などとしてはどうか。
- 【美術】高次の資質・能力について、教科固有の学びと教科横断の学びの両立が大切だとすると記述内容はシンプルなほうがよい。ただし教科を学問として学びや特性を現場にわかりやすく示す必要がある。中学校美術の思考力、判断力、表現力等「豊かに発想したり構想を練ったり」の文言を「発想・構想することができる」などコンパクトでもよいのでは。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑭

【思考力、判断力、表現力等】（つづき）

- 【美術】思考力、判断力、表現力等について、高美の鑑賞領域では「自分と美術に関して造形的な良さや美しさを感じ取り」とあるが、近代的な美意識の資質能力が示されており、現代美術の要素が欠けていると感じる。現代美術においては既存の造形意識や美意識にとられない新たな価値や自由な広がりがあり、鑑賞領域では押さえておく必要がある。

【学びに向かう力、人間性等】

- 【音楽】学びに向かう力、人間性等については、子供の立場からの記載（楽しさを味わう、音楽活動に取り組む）と教師の立場からの記載（育む、養う）があり、整理する必要がある。
- 【美術】音楽や書道にも関係するかと思うが、学びに向かう力、人間性等について、美術でいうと「つくりだす喜びを味わいながら」の部分で「初発の～」を表現できているか疑問。

【価値】

- 【音楽】小中学校の目標でも高校のように「音楽教育では音楽そのものに価値があると認められるものを扱っている」という文言をもう少し明確に入れるよう検討してもよいのでは。音楽教育では芸術性を前面に出しすぎるのもよくないかもしれないが、学習指導要領では「情操を培う」と明記されており、解説には美的情操という言葉が明記されているので小中学校であっても、こうした観点から文言を整理していく必要がある。
- 【音楽】中学校音楽に「曲や演奏の価値などを考えながら～」と入っている。この「価値」について十分な説明が必要な一方で、逆に小学校と合わせた書き方で、たとえば「曲や演奏のよさや美しさなどを見いだしたりしながら味わって～」という、現行で使っている「音楽のよさや美しさ」の文言が残るとよいと思う。
- 「意味や価値を追求する」「見いだす」「つくりだす」等の差については、改めて各科目の話を聞きながら教科ごとの特性あるべきだが違いを説明できることが大事。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑮

【鑑賞】

- 鑑賞は子供にとって大切な学びである。形や色などを根拠に鑑賞することはできている一方で、その先の文化についても出会えるようにしていくなど、鑑賞を深めていくことが大切。
- 実体験を重ねていくことが物事を見る精度を高めていく。自分の感覚を十分に実感した上で鑑賞することにより、見えているものの向こう側にある作家の息遣いや緊張感、深みなどが感じ取れ、深い学びにつながる。
- 現代アートにあるような、作品の中に内在している人類の願いや差別への叫びなどに着目し、鑑賞の中で学んでいくことが重要。時代や社会について考えるきっかけになり、課題や問題提起をしていける視点をもつことにもつながる。
- 作品をどのように捉えていくのか、表現された世界をどのように読み解いていけばよいのか、鑑賞者を育成することが重要。鑑賞のプロセスの具体的手順や方法といった鑑賞の深化を発達段階を通して段階的に育てていくべき。事象を分析的に捉え、批判的に物事を捉える力はあらゆる教科・科目に通底する資質・能力である。
- 感性や感じ取る力は非常に重要。観察や鑑賞を通して心が動く体験を子供たちができるようにしていく必要があり、自分や他者の感情を自覚し受け止めることが大切。
- 【音楽】小学校の「曲や演奏のよさや楽しさ」「音楽を聴き深める」というキーワードは重要。一方、中学校では、思考力、判断力、表現力等に「評価しながら」が含まれるが、客観的な部分が前に出すぎているので、小学校と同じような形（「見いだしながら」）もありえるのではないか。
- 【音楽】「聴き深める」について、学習の向かうべき方向性が示されている。ただ、「味わって聴く」という表現には、音楽に浸るとか、全身体で聴くというニュアンスが含まれている。これまでも使ってきた「味わう」という文言が消えてしまうのは残念。
- 【図画工作】「生活や社会、文化と関わり」が入ったのは有意義。生活、社会、文化の視点を見方・考え方に取り入れることによって、作品や美術館、博物館、文化財などを教師が授業に取り入れる必然性が生まれる。時間軸が子供たちの中に自然に意識づけられると共に、鑑賞の意義や学ぶ意義が伝わりやすくなるのではないか。
- 【美術と図画工作】適切なタイミングで理解が深まったり新たな気づきが生まれたりする情報を提供することが不可欠。発達段階の話も出たが、どのような知識を伝えていけばよいのかという視点が現場では弱い。次の作品を見る時に鑑賞を深めて作品を深く味わう力に繋がってくる。
- 【書道】思考力、判断力、表現力等の「感じ取り」について、鑑賞の際は、書かれた言葉を読み取って理解し、自己と向き合い再度作品と対峙したり、時間をかけ何度も鑑賞したりすることで書の良さや美しさを理解できる。「感じ取り」としてしまうと、文頭の「書のよさや美しさを感じし」と似通ってしまうのではないか。
- 【音楽】A表現を「歌唱・器楽」「音楽づくり」に分けることは賛成。歌唱と器楽という垣根を越えた、新たな発想に基づく題材構想に期待。
- 【美術】「活用して作品等を読み解いていく」ことは鑑賞の技能となりうるのではないか。
- 【図画工作】鑑賞の技能を位置づけることは有意義と考えるが、図画工作・美術では技能を「創造的スキル」としており、技能をテクニックと捉えられないようにすべき。「体を使う」とあるが、「体」よりも「身体」のほうが良いのではないか。音楽では「身体」を使っている。

第1～6回芸術WGにおける主な意見①⑥

【鑑賞】（つづき）

- 【図画工作】感じ取ったことを他者に伝え共有することも鑑賞で必要な技能ではないか。
- 【美術】中学校美術の鑑賞における「実感を伴って理解している」について、子供たちの学校での姿をイメージしてみるとよいのではないか。例えば、中学3年生が美術館の作品を鑑賞した際、鑑賞を通して美術のおもしろさを再確認し、身近な美術を見てみたくなったという感想があった。高次の資質・能力について、子供たちのどのような姿に現れるのかを学校の先生方にわかりやすく伝えることが必要なのではないか。
- 【美術】イギリスTateによると、美術館や博物館で作品を鑑賞する平均時間は8秒とされており、大人も子供もよく見るということをしていない。また、見る視点をつかみにくいとされている。子供はよく見ること、見ることで情報を掴むことができていないことを踏まえると、中学校美術の鑑賞の区分の現案は、授業改善につながるという意味でも、子供たちが自分で何を学んで身に付けたかわかるという意味でもとても良い。
- 【美術】子供たちは今たくさんの情報に囲まれており、その中で何をすることも早いほうが良いとされ、よく見ることができていない。授業の中でそれができるようにしていくことが大事。鑑賞領域における思考力、判断力、表現力等で「見つめ」などと記載があり、知識及び技能では「情報を読み取ることにより」などとはっきり視点が示されている。先生方にとっても子供たちにとってもじっくりと「見る」ことに向かえる手だてになるのでは。

【充実感、達成感】

- 楽譜を読める技能など、粘り強く学習しなければ身に付かない身体的な技能を習得する過程で達成感などを感じることができ、これが学びに向かう力・人間性等にも関わってくるのではないか。
- 表現や鑑賞の前提として、子供の感覚や情意、感性が位置付いていることが必要。子供が教師に伝える「できたよ」には3つの意味があり、①作品・発表ができたという意味、②イメージできたという意味、③私ができた、という意味がある。「私ができた」に対して、活動において子供の感覚や情意、感性が働いた表現や鑑賞として捉えることが教師には必要である。
- 【図画工作】学びに向かう力・人間性等に「楽しく」が位置付いた点は理解できるが、学習に対する子供の情意的な心づもりが必要であり、「楽しい」や「楽しく」が表面的な感情ではなく、その意図が通じるように表していくことが必要。
- 「楽しさを味わう」や「喜びを味わう」などの使い方が各教科微妙に異なり、教科の特性から考え直す必要があるのではないか。芸術系教科では特に大事な部分であり、学校において目指すべき、学びに向かう力、人間性等としてどういう表現が良いか精査する必要がある。「達成感を味わう」のように内発的な動機付けが高まることに関連する文言を含め、改めて検討していくことも必要。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑰

【豊かな社会の創造や幸福な人生】

- 創造性は、自分なりの意味や価値をつくりだすことに留まるのではなく、社会との関わりにおいてベクトルを外へ向けていくことが重要。
- 芸術系教科は感性や情操の育成につながる審美教育である。価値を実感できることにより積極的に学びに向かっていく力につながり、価値が生活や社会を豊かにすることにつながるということに実感がもてるようにすることが重要。
- 芸術を通して豊かな人間性を涵養し、創造性・感性を育み、情操を培っていくことは豊かな社会の創造において不可欠である。
- 伝統と文化や文化芸術の意義を明確に位置付ける必要がある。日本の文化と世界の文化を知り、比較して学んでいくことや多文化理解はこれからの社会に必要な資質・能力であり、生活や社会とのつながりにおいて芸術が幸福な人生や豊かな社会の創造に繋がることを、表現や鑑賞を通して実感をもって学習することが大事。
- 【音楽】見方・考え方の後段、「自分や他者にとっての意味や価値を見いだす」とあるが、高校では少し広げて他者を「社会」とし対象を明確にすることもありうる。学びに向かう力・人間性等の中で、「豊かな生活や社会を築いていく態度を養い」とあるので、具体的に示していくこともあり得るのではないか。
- 【図画工作】造形美術の働きを位置づけることは賛成。自分、他者、自他の関係性や地域、社会、文化と対象に広がりがある。地域、社会、文化に対する働きは、役に立つと狭義で捉え得られがちだが、図画工作科では、自分に対する働きがあつてこそ地域、社会、文化への働きも成立する。
- 【美術】「生活や社会、文化と関わり」の部分について、創造性を身に付けた結果、生活や社会の豊かさにつながるということについて目標での明記が必要ではないか。
- 学びに向かう力・人間性等について、相手がどのような感性、考えで受け入れるかという、受け取る側を考えることが多様性を尊重することや社会に繋がっていくので、その点を強調してもよいのではないか。
- 【美術】地域の文化や美術教育を子供に教えるのではなく、子供と一緒に教師も学ぶことを通して、日本人としての美しい生き方、豊かな生き方を理解できると考える。文化の理解を誤解して受け取られないように、知識の中に位置付けるのであれば、「美術の働きや美術文化を理解する」という文に「実感的に理解する」と追記できればよい。
- 【図工、美術、工芸】生活、社会、文化との関わりが示されているが、それぞれの教科・科目で関わりニュアンスが異なるのではないか。
- 【書道】目標に「作品や書の美」とあり、芸術的な書作品以外の書も含め社会とのつながりを考えていく方向性を理解した。ぜひ進めてもらいたい。
- 小中高に共通することだが、資質・能力（概略）で身近な生活と社会と美術の共通事項で「美術の働きや美術文化について理解する」とあるが、具体的な例示がまだない。観察力ひとつとっても各学年で違う。他の教科や暮らしの中でも課題を正確に取り出せる能力として観察の個別具体的な能力を位置づけていくのが子供たちに芸術教科の存在意義を実感させることにつながる。今後検討いただく段階でそのあたりを意識してもらいたい。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑱

【教科横断や連携の在り方】

- 概念理解は国際バカロレアの学びと共通していると感じている。教科は教科として学び、教科等横断的な学びは表面的なつながりではなく、本質的な概念で繋げていく。
- 他教科にも汎用できる資質・能力について。現行学習指導要領には「知識を相互に関連付けて」と記載がある。双方向性の学習が重視されているが、他教科に影響を与えるだけでなく、他教科で身に付けた力を芸術系教科で使うこともあり得る。
- 芸術教育で育まれる他教科に汎用する資質・能力は、想像力、試行錯誤する力、挑戦する力、リスクをとる力、自ら問いを立て考える力、答えのない問いに最適解を見つけ出す力、多様な解を互いに認め合う力が考えられる。
- 芸術はSTEAMのAの役割として新たな気付きを生み出し、粘り強く解をまとめる教科としての関わりがふさわしく、探究的な学びを深めるためには、その側面から芸術系教科と他教科との連携が重要。子供たちの思い付きや失敗を受容する環境の醸成が大事。
- 日本型のSTEAM教育をどうつづけていくか。STEAM発祥のアメリカと日本とは歴史や考え方が異なる。STEAM教育は教師自身のマインドセットの向上にもつながるのではないか。
- STEAMは理科系に偏りすぎているのではないか。もっとAの学際性に着目してもよいのではないか。
- 【図画工作・美術】イノベーションに繋がる相互に関連付ける力が芸術系教科・科目の重要な資質・能力。作品に至るまでの過程を重視することが大切で、生活・総合的な学習の時間における探究のプロセスと図画工作・美術における探究・創造のプロセスの共通点・相違点踏まえながら、知識や技能を考えていくことが重要。
- 【メディア】映像分野は教科を繋ぐハブである。物語構成や言語表現での国語、社会課題を考える社会、観察としての理科、論理的思考としての数学、外国を意識したコミュニケーションとしての外国語など。芸術の他分野にも密接に関わる。
- 小中高全体で各教科・科目を俯瞰し、見方・考え方を再構築していくことも重要。学びの深まりについて、書道では小・中の国語科書写とのつながりがあることから国語科書写との連携が重要。文字文化の考え方を再整理する必要があるのではないか。
- 地域社会と学校をどう連携させていくかが重要。芸術系教科の重要性を地域社会にどう理解してもらうか。その上で、他教科との連携はこれまで以上に重要な視点になってくる。

第1～6回芸術WGにおける主な意見①9

【区分】

- 【図画工作】区分の示し方は賛成。「**造形遊びをする」「絵や立体、工作に表す**」についてはもう少し抽象的な内容でもよいのでは。
- 【美術】区分が「自分と美術」「身近な生活や社会と美術」という分け方は、**教師もこの分け方は違和感は少ないのではないか。**
- 【高校美術】「自分と美術」「社会と美術」という区分に違和感。**自分を考える際には社会を考えることにつながるし、社会を考えるときにも個人（自分）の考えは重要になる。**分けることによって行き来を断つことになってしまうのではないか。
- 【美術】**美術の区分について妥当な判断と考えるが、**今回の改定の目玉でもあるので、**十分に時間をかけて議論するべき。**
- 【美術】区分はわかりやすく示されている。「自分と美術」「身近な生活や社会」は**思考の過程の違いで分けられているので、授業が作りやすい。**A表現とB鑑賞が同じ分け方なので**一体化しやすいのもよい。**
- 「**自分と美術」「社会と美術」の区分は近代から現代の美術史からみて適当ではないか。**「社会と美術」について、60年代以降はジェンダーや環境などのテーマが増えた。2010年ごろからはソーシャルプラクティスなどが実践されている。伝統的な絵画や彫刻の手法と変わり、アーティストと観客の区別がなくなったり、討論や教育が行われたりするという、現代美術における社会とのかかわりの手法を学校教育に取り入れるのもアリではないか。
- 高校工芸について。美術は絵画や広告、メディアなど、表現のジャンルで内容を分けているのに対して、工芸では以前から学びの方向性で区分を設けていた。工芸には技法がたくさんある。それらの技法ごとに記載を分けるのではなく、**方向性のみを示すことが従来から続いているが、その方針で成功しているように感じる。**
- 区分を「**学習の方向性**」と捉えるのは良いと感じた。
- 【図画工作・美術】区分について。教科の特質や現状の課題を踏まえたものと理解しているが、**区分に分けるということは、子供が発揮する資質・能力には方向性があるというのを示す必要があるということの意味しているのではないかと考える。**そうした説明をどこかで丁寧に説明する必要があると考えている。
- 【図画工作】高次の資質・能力の区分について、区分を設けることはよいと思うが、図画工作の区分が少し具体的なのではないか。美術制作や表現も重要な活動だが、区分としては**抽象的なテーマやコンピテンシーベースのテーマをつけることも考えられるのでは。**個人の自己表現だけで考える部分と、客観的視点が求められる他者との活動に分けることや、個人の探究と他者との探究などに分けることも考えられるのではないか。

第1～6回芸術WGにおける主な意見⑳

【地域連携】

- コミュニティの規模や密度が地域によって多様化しており、**地域連携の在り方を一律に示すことは難しい一方、学習指導要領においては一定の方向性を示すことが必要。**
- 【音楽】地域連携の強みは、学校だけでは得難い優れた技能や経験をもつ人材を招き、児童生徒が質の高い芸術体験に直接触れられる点にある。他方、**音楽には学習の方法自体にも地域や国の伝統が息づいており、その「学習の文脈」を踏まえた継承の観点が不可欠**である。学校が地域と協働しつつ、校内に自律的な伝承の仕組みを構築する方向性を学習指導要領にも示すことが望ましい。
- 地域の力を借りるという発想だけでは、地域人材への依存や学校への一方通行になり、発展性が乏しくなる恐れがある。**「連携」の名の下に丸投げに陥ることのないよう、自律的な連携と文化の継承の仕組みが必要。**
- 地域連携は、教員にとって人・物・金・時間の調整などエネルギーを要するが、**教員が人と人をつなぐファシリテーターとしての役割や調整力を育むうえでも非常に重要**である。
- 【美術】学校教育の中だけでは見えにくかった**「子どもの地域への思い」や「地域が子どもを思う気持ち」を目に見える形にするのがアートの役割**と考える。連携に先立ち、各教科が学校教育目標に照らし「今ここにいる子どもたちの実態から何ができるか」を起点に構想することが重要で、教師の願いだけでなく子ども起点で創出されることが望ましい。
- 【美術】教員や学校がまず**地域の良さや課題に目を向け、総合的な学習等と結び**、美術科こそ社会に開かれた教育課程を牽引すべきである。
- 地域連携において**「文化」は重要なキーワード**である。我が国には多様な文化・芸術が広がり、将来に受け継ぐことが重要。地域連携を通じて**我が国の芸術文化に触れ、グローバル化の進展の中で、郷土や自国の文化を語り紹介できる力の育成が必要**。
- 【書道】「生涯にわたり芸術を愛好する心情」の育成の観点から、**鑑賞者を育てる視点が十分でない**という課題がある。**博物館・美術館との連携や、遠隔地でもデジタル活用により鑑賞体験に向かう素地を養う取組が重要**。
- 見方を発見していくという子供たちの姿は、美術館など様々な地域との連携で見えるところで、**鑑賞の技能にもつながる**。
- 学校だけでなく、行政や地域が連携して後押しすることが重要。例として、さいたま市のうらわ美術館には教育委員会の指導主事が配置され、学校との連携（出前授業、作品貸出し等）が機能している。**文化施設から遠い学校の児童生徒にも体験機会が行き渡るよう、行政・地域の連携による環境整備が必要**。
- 「地域」と一言で言っても**学校の立地状況により状況は大きく異なる**ため、まずは各校の現状に即して考えることが大切。
- 地域の物的・人的資源の活用は、保護者・PTA、地元町会との連携など身近なつながりから芸術資源へと広げていくことが可能。いきなり著名文化人や伝統工芸へ飛躍せず、**現場が無理なく連携できる在り方を検討したい**。
- 学校現場だけでなく**行政との連携**による後押しが重要。博物館・美術館等との結び付けをより積極的に検討し、自治体の多様な状況も踏まえ、**国や国立アトリサーチセンター等の活用も選択肢**となり得る。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②

【地域連携】（つづき）

- **芸術が社会と学校、教科間をつなぐハブとなり**、芸術教科は教科横断的学習を通じて地域・社会とのつながりを強める。児童生徒にとって豊かな学びにつながる意義は大きい。
- 連携で最も重要なのは、**育成すべき資質・能力の共通理解が関係者間で成立していること**。成功事例では自明化しがちだが、機微な対応・関わりの積み重ねが前提にある。また、学習指導要領を学校外の人を読んで理解できることも不可欠の前提である。
- 連携では**各芸術科目の見方・考え方が学習プロセスに正しく位置付くことが必要**。特に小学校では全科担当のため、音楽科や図画工作科の見方・考え方が正統に位置付くことが重要。また、図画工作科が単なる「ものづくり」に手段化されないことが重要。
- 連携先は自明化された文化施設に限らず、CSRで子どもの芸術活動を支援する企業、公園やショッピングモール等の生活の場など、**従来自明でなかった対象も今後見出していく必要がある**。
- 芸術科の学びのフィールドが地域へ広がることで、学びはより探究的になる。総合的な学習の時間で出会った地域課題を自分事化し、音楽科等で取り組むことで、**生涯にわたる芸術の意味の探求や知識・技能の追求につながる**。
- 地域の芸術文化との関わりを持続可能にするには、教員だけが担うのは困難。芸術科の使命の一つは文化の担い手の育成であり、**学校運営協議会等と教科・地域の願いを共有し、地域が担い手となる仕組みづくりを働きかけていく必要がある**。
- 芸術文化の体験的学習は、**日常では味わえない空気感によって子どもの心を開き、新しい価値を学ぶ機会**となる。この機会を生かし、**単なる鑑賞で終わらず学びへ転化する視点**が重要。演劇分野では観客から舞台側への当事者性の転移により学習の転移のエビデンスが認められていることも参考となる。
- 地域の伝統芸能・伝統工芸の学習では、美的体験に加え、地域資源を生かすための先人の苦心と産業化の営み、経済的効果等を知ることが**特に高等学校段階で大きな意義をもつ**。
- 【小学校音楽】現行学習指導要領の「学校内及び公共施設などの学校外における～」の表現は、文化資源が多様化する中で限定的イメージを与えうる。例えば「**文化施設など**」とする、または「**公共施設などの**」の文言自体を削除する等の検討の余地がある。
- **本物に触れる体験**を年間指導計画や学校全体の教育活動の中でどう位置付け、指導事項や資質・能力の育成に結び付けるかが重要。中学校・高等学校では授業時数や業務量の制約が課題であり、**地域と学校をつなぐコーディネーター的役割の配置が有用**である。
- 美術教育に関連する表現分野は多様な広がり、**高度化が進んでおり連携はますます必要**。映像メディアを用いた表現は従来の造形表現とは全く異なる表現手法の理解や習得が必要だが、社会にニーズがあるし、社会に貢献が可能。たとえばリタイアした映像制作経験者や地域のアーティスト、美術系大学の学生などの外部の多様な人材と連携して**一緒に教育プログラムを作り上げていくことが重要**。その連携を進めるために制度設計などが必要になる。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②

【地域連携】（つづき）

- 「開かれた教育課程」にはさまざまな意味があるが、芸術系教科・科目における外部人材や学校外の文化施設等との連携は、中でもその扉を開くものとして重視されるべきもの。
- 芸術系教科・科目の「見方・考え方」案である「意味や価値を見出すこと(音楽)」「意味や価値をつくりだすこと(図工・美術)」「意味や価値を追求すること(書道)」は、教室の中での学習の方向性を示しているが、同時に、子どもたちが将来において社会の様々な文化芸術と出会う場において発揮されるべき資質・能力の在り方を示しているとも言える。
- 「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」によって計画された教室での学習とは違った、「学びに向かう力、人間性等」も含めた混然とした体験的学習が、芸術系教科・科目における外部人材や学校外の文化施設等との連携による学習にはある。むしろ、社会での様々な文化芸術との出会いのプレ体験をしているとも言える。
- 外部連携による学習と通常の授業との関連性は十分検討されるとしても、これを通常授業と同じように「高次の資質・能力」による学習の構造化を当てはめるには無理がある。**「ホンモノ」を通した、学びの真正性を担保するものとして外部人材、学校外の文化施設等や地域との連携は考えるべき。**

第1～6回芸術WGにおける主な意見②③

【高校芸術科の学びの改善・充実】

- これまで学習指導要領冒頭の芸術科の目標が十分活用されてこなかった。義務教育段階では「芸術」という横断概念に触れる機会が乏しいため、小中の学びを発展させ、高等学校段階で芸術の意義・価値を再認識する機会の設定が望ましい。現行改訂で新設された〔共通事項〕を踏まえ、**芸術科を貫く共通の指導内容を示すことは次期改訂の大きな視点となる。**
- 改善の方向性としては、**各科目の導入段階で、芸術の多様なジャンルや表現形式、日本文化の独自性を認識しつつ、選択科目としての学びを再認識させる**のが良いのではないか。また、まとめ段階では、表現・鑑賞の学習成果を踏まえ、文化芸術の広がり多様性、社会における芸術の役割、芸術を学ぶ意義や価値について自覚させることで生涯にわたって芸術を愛好していくことにつながる。
- 示し方について。芸術科全体を貫く内容は評価に適さない可能性があり、**目標や見方・考え方の解説で趣旨を示し、各科目の内容の取扱いに共通文言を置くなど、実践上の負担に配慮した整理が必要。**実現に当たっては、教職員支援機構等による教員研修、教科書の冒頭への反映、入学前配布の説明資料への掲載、実践検証協力校での事例蓄積・提示が有効ではないか。
- 高校段階では、芸術の学びを外に向けるメッセージが重要。例えば学びに向かう力、人間性等における文言を「**芸術を通じた学びによって心豊かな生活や社会をよりよくする**」等に見直す、また「**情操をより豊かに高める**」等の表現を検討してはどうか。OECDのエージェンシーの観点からも、社会を支え、創る主体性の意識化が要となる。
- 高校では、普通科目以外の科目を創設するのは急には難しく、まずは**既存科目の指導事項・内容の取扱いに趣旨を反映することが現実的**である。小学校・中学校9年間プラスIを付した科目とあわせて**10年間の学びの集大成として、この先の芸術文化との関わりを自覚させる**場面があってもよいのでは。
- まだ実践が足りないので、**スーパーサイエンスハイスクール（SSH）のようなモデル校の指定や文化庁で取り組んでいるCBX（Cultural Business Transformation）等との連携による実践蓄積が有効ではないか。**
- 科目の専門性を担保した上で「**芸術とは何か**」を考えさせることが重要。複数科目を開設する学校では、年度初めに各科目教員が意義・目標を語る場の設定や、Iを付した科目のまとめを合同授業とし相互発表・熟議を行うことが考えられる。単科目校では校外学習による他分野施設の訪問や他分野専門家の講演等の工夫が有効。いずれも内容の取扱いで示すことで実施可能と考える。
- 【書道】小中の国語科書写との接続は従来からの課題であり、高校導入期に「芸術としての書」を扱う実践が広く行われ、教科書でも冒頭に記載がある。一方、**音楽・美術・工芸が義務教育段階の学びから高校の芸術科へ円滑に接続できているか、また高校教科書の冒頭に芸術としての意義付けがあるか等の確認が必要。**芸術の学びの方向性が示されることは、科目横断的に協働した作品制作等の一層の推進にも資する。**教員の過度な負担とならないよう、事例・教材の公開・共有や十分な支援、わかりやすく柔軟な内容での明示が必要。**
- 研修や教科書の工夫が鍵。各科目の冒頭で「芸術とは」「美」「芸術文化」等を考える導入ページや、課題研究のヒントとなる構成があると、教員・生徒ともに展開しやすい。中学校段階でも「**芸術における音楽／美術／書道**」といった領域意識を持たせる工夫によって**芸術教育が魅力的になる**。教員養成でもこうした視点の重視が望まれる。
- 【美術】今日の芸術は総合芸術として発展しており、映画・アニメーション・ゲーム・舞台芸術等、複数分野を統合して新しい表現を生み出す力の育成が重要。**現行の美術Ⅰにある映像メディア表現を、従来の造形専門だけで担うのは限界があり、メディアアート等の総合芸術分野を高等学校芸術教育に明確に位置付けることが時代に即した改革となる。**他分野の時間数を削らず、芸術教育を超えた広い領域として捉えることを検討すべき。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②④

【高校芸術科の学びの改善・充実】（つづき）

- 高校においては、音楽・美術・工芸・書道と科目が分かれてしまうが、芸術教科全体として学ぶ意義を考えることは重要。
- 高校のどの科目においても自分や社会にとって芸術がどのような意味や価値をもつのかを学ぶことは、人生を豊かに生きていく観点から重要。
- 高等学校芸術科全体の見方・考え方が、各教科の要素を組み合わせた形で提示されている。この部分を、教育課程全体における芸術教科において、何を学ぶのか、どのような方向性なのか明確にさせる必要がある。
- 【音楽】鑑賞者、批評者として育つことの大切さについて。よりよく表現することよりよく聴くことは表裏一体であり、音楽の構造理解に加え、文化的・歴史的背景の理解を投射して聴くことが重要。批評者としての資質をもつ友人との対話環境を得ることが高等学校で専門的に学ぶ意義の一つであり、鑑賞研究の授業を核に、校内外と連携して新たな価値の発見・創出を図ることの重要性を再確認したい。
- 【音楽】音楽を専門的に学ぶ生徒には音楽家ジストニア等の罹患リスクがあるが、予防に向けた教育は十分とは言い難い。学習指導要領に実技に伴う身体の不調への留意・予防に関する記述を位置付け、ウェルビーイングの向上と将来のキャリア保全の観点から、健康の保持に関する教育が早期になされることを望む。
- 多くの高等学校では、芸術科としての教科性を基にした教育課程の編成がなされず、単独の科目の状況のみを考慮して開設科目が決定していることから、「Ⅱを付した科目」、「Ⅲを付した科目」の履修状況が極めて低く、工芸は「Ⅰを付した科目」からすでに低い状況。
- 教員配置や音楽教室、美術教室などの施設、設備などが、科目開設の主たる要因となり、教育課程全体の中での芸術科の役割が論議される場面は少ない。
- 科目を選択する生徒にとっても芸術科を学ぶという意識は薄く、単に中学校での音楽や美術の学習経験を基にした科目選択がなされ、学習の動機付けが希薄で、「Ⅱを付した科目」「Ⅲを付した科目」を開設しても履修登録者が少ないという状況もある。
- 諸外国においては、公教育において芸術を学ぶことの重要性が認識され、国内でも中高生の芸術に対する興味関心は高まりつつあることから、各関係科目の学習内容として「社会において芸術が果たす役割」または「芸術を学ぶ意味」を考えるなどの項目が必要。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②

【その他】

- 現行の**工芸の内容**は、「身近な生活と工芸」及び「社会と工芸」により整理され、どのような視点に立って資質・能力を育成するかという学びの方向性を意識したものとなっており、今後一層進めていくことが必要。
- 作品をつくっていくというプロセスの中に、創造性、批判的思考、問題解決能力、協働性、コミュニケーション能力、ICTリテラシーといった重要なスキル、能力の開発が含まれている。
- 各科目の共通する中核的概念は見えてきそうだが、各論に入ったときにそれがどう結び付けられるか。
- 構造化・表形式化をイメージするにあたり、現行学習指導要領解説の系統表のように発達段階ごとの系統をはっきりさせていくべき。見方・考え方は系統立てるのは難しく、シンプルに示していくべきではないか。
- 総則評価部会の構造化パターンにおいて示された、高次の資質・能力を「知識及び技能の統括的な理解」とすることについて、「理解」という言葉で文末をまとめることは芸術系教科の内容の特性を考えたときに適切かどうかと考える。
- 高等学校芸術科の教科目標が、各科目を繋ぎ合わせたものになっている。キーワードを抽象化してもう少し端的に短くできればよいのではないか。
- 【美術】学びに向かう力・人間性等において「心豊かな生活を」の生活の前に「社会」を記載してはどうか。
- 【図画工作】造形的な視点がどのようなことなのかを、もう一度再確認する必要があるのではないか。
- 【美術】現行の取組の内容は、造形性が主軸にある様に見える。造形性に収まらない現代美術は美術教育に組み入れられていないのではないかと感じている。
- 現代特有のメディアによる感情のコントロールやA Iの進化といったメディア環境において、自分を取り巻く社会環境に対する批判的な思考が育まれるべきではないか。
- 【書道】見方・考え方について「文字や書」と改められているが、別々に取り上げることで、文字と書が別物であるような印象を与えるのではないか。デジタル化により、筆で文字を書く手段以外も考えられる中で、文字や書が何を指しているのか混乱を生むのではないか。
- 文頭にある「捉えたり」について、知的に分析するというイメージもあるので、「感覚的に捉えたり、感じたり」とした方が正確に伝わるのではないか。
- 並行パターンはⅠ～Ⅲの資質の深まりを一見してとらえやすいが、思考力、判断力、表現力等の統合的な発揮と知識及び技能の統合的な理解を捉えるのは並行パターンでは難しいのではないか。例えば、高等学校の科目の履修が必須履修科目であるⅠを付した科目で終える生徒が多いということをふまれば、高等学校芸術科においては、全体を並列パターンで示していく検討の余地もあるのではないか。
- 「自分や他者にとって意味や価値を見いだす」という部分を、目標のどこかに位置付けられないか。目標が難しければ、高次の資質・能力として、知識及び技能の統合的な理解の部分にそれがあたるか。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②⑥

【その他】（つづき）

- 中一ギャップ解消のため、小学校と中学校とのつながりを大切に考えるべき。
- つくって終わり、表現して終わりではなく、展示や発表等でのプレゼン、メッセージを発信するかが高度なフェーズとしてある。表現して伝える、といったことも入れられないか。
- 高次の資質・能力の内容について、美術においては、作品を企画し構想するところから制作や発表にいたるまでの創造的活動の間で、高次の様々な資質・能力が求められる。
- 先が読めない時代だからこそ、問題解決能力だけではなく、問題を見付け提起する力、批判的（クリティカル）な思考力も、高次の資質・能力に入れてはどうか。
- 【音楽】「見方・考え方」について、現行より広く、音楽になる前の音や事象をとらえて考えるのはよいと思う。
- 【書道】示し方の基本的なまとまりについて、書道I,II,IIIと展開する中で見えてくる学びを踏まえて、高次の資質能力を検討するものではないか。学習指導要領を表形式にしていくことの利点であり、新たに高次の資質能力を設けることの意義ではないか。書道 I, II, IIIの内容を早期に示していただきたい。
- 【書道】学習評価について。学校で評価基準を決める際、「高次の資質・能力」が評価とどのようにかわるのかという疑問が現場から出てくるのではないか。
- 【書道】高次の資質・能力の示し方について、芸術科書道では分野の区分を設けない案が示されているのは他の芸術系教科とは異なるが、現場の教員にとってわかりやすいと思うのでこれで適切だと思う。
- 高次の資質・能力と発達の段階の関係をどう考えるか。小学校の場合6年間があるが、低学年から高学年まで、そこで達成される姿を一言で表すのは難しい。
- 表形式にするにあたり、罫線で区切られることで、各領域が分断される印象がある。点線で示すということも考えられるか。
- 小学校の図画工作は学級担任が行うことを踏まえると目標の表し方はわかりやすい。
- 目標中の「見方や感じ方」と、「見方・考え方」の「見方」との違いを整理すべきではないか。
- 具体的な文言を議論するフェーズに入ってそれぞれの科目の違いや科目間の統一性が見えてきたが、「高次の資質・能力」、「見方・考え方」、「目標」の関係性をもう少し明確にしないと次の内容の議論に進めないのではないか。
- 【音楽】「深める」という言葉がいろいろな箇所に使用されているが、それが何を表しているのかははっきりしておかないといけない。高次の資質・能力から評価規準を作っていくのか、目標から作っていくのか、何を表しているのかははっきりさせたい。
- 高校芸術科の見方・考え方について、方向性としてはまとまりが出て良いと思うが、「美を構成する要素とその働き」と「文化などの視点」のレベル感に差異を感じる。「美を～働き」は具体的だが、「文化などの視点」は人間の営みの観点で大きなところで捉えられる。今後ふさわしい言葉が示せたらよいと思う。

第1～6回芸術WGにおける主な意見②7

【その他】（つづき）

- 企画特別部会の「資質・能力の深まり」と「資質・能力の一体的育成」の可視化による「深い学び」のページの図には、横向きの矢印が示されているが、**斜めにも矢印が向くことがあるのではないか**。今後、個別の資質・能力の整理を検討していく中で、この関係も意識して考えたいと思う。
- 【音楽】小学校音楽の高次の資質・能力について、「知覚し感受したこと」という文言は知覚が先にあるように見えるが、感受が先にあることもあるしバランスもあるので、**「知覚したり感受したり」や「知覚・感受したり」といった表現はどうか**。すっきりさせるということもできないかという視点で「思考を巡らせ」をなくして**「よりどころにして」で次につなげたり、「自分や他者にとって」を当たり前のこととらえてなくしたりするのもありかと思う**。
- 【図画工作】見方・考え方と高次の資質・能力の関係性について、現状では個別の学習内容から帰納的に導かれることが多いと捉えているが、**芸術の本質にかかわる図画工作科の学びの意義という観点ではメッセージがやや弱く、活動レベルにとどまっている。これまでの解説や実施状況調査の結果で示されている言葉をもとに検討していくことが必要**では。
- 参考資料で見方・考え方を灯台に例えているように、現場の先生が常に立ち返り、学習目標に向けて学んでいくための大切な目印であると考え。であるなら、**記述がコンパクトで分かりやすく、他教科の先生や学校外の人々にとっても、分かりやすい文言であることが必要**。大事なのは**生涯にわたって学び続ける視点**で、その視点から可能であれば整理していく必要がある。
- 芸術教育において今後より重視すべきなのは、**作り手と受け手のコミュニケーションを意識させるカリキュラム**と思う。作品の完成度だけを評価するのではなく、作り手と受け手のやり取りそのものを学習課程に組み込むことで、子供は表現が一方通行ではないということを理解し、相手に自分の意図が共有できた喜びも味わうことができる。目標や高次の資質・能力に、**「共有する」、「議論する」などのコミュニケーションのワードを入れたほうがよいのでは**。
- 表現が固まってきて細かいところに目が行きがちだが、**学校教育の中でじっくりみることができる態度を育てることが大事**だということを、これから言葉を精査していく中で意識できたらよいと考えている。動画を早送りで見ると、情報を合理的に得ようとする現代の傾向の中で芸術教科に何ができるかを再認識した。
- 【書道】書道Ⅰ～Ⅲの目標の改善案が示されており、Ⅰは「書道の幅広い創造活動」、Ⅱ、Ⅲは「書道の創造的な諸活動」と記載されているが、Ⅰの創造活動のほうが高度な芸術活動にとらえられるので、「創造的な活動」としたほうがしっくりくる。
- 文言の精査も大事だが、**そもそも芸術教育は今の子供たちにとってどんな役割をもつか**忘れないようにと思った。
- 見方・考え方の高校芸術科目の一覧において、並べて見たときに語尾が大事だと思った。音楽では「意味や価値を見いだす」、書道では「追求する」、美術では「つくりだす」の**語尾が示す共通性や連関について各教科の高次の資質・能力から考える必要がある**のでは。
- 高校芸術科の各科目の目標について。美術Ⅰ、Ⅱ、Ⅲと工芸Ⅰ、Ⅱ、Ⅲにおいて日本語の表現として少しの違いである。方向性としてはよいと思うが、**より評価の観点として現場がわかりやすいものになるとよいのでは**。たとえば学びに向かう力、人間力等の「感性を高め」「美意識を高め」「感性と美意識を磨き」など系統性が示されているが、評価だと**曖昧さがあるかと思うので今後工夫できるところ**であるかと思う。